慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国語学における新語研究の現在
Sub Title	On the presence of the research concerning new words in Chinese linguistics
Author	赤平, 恵里(Akahira, Eri)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2009
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.96, (2009. 6) ,p.113(164)- 132(145)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00960001-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国語学における新語研究の現在

赤平　恵里

1. はじめに

中国の語彙学界では、新語に関する研究が盛んになって久しい。これは、改革開放後の新語誕生数が近代語彙史上最大であるためというが、その隆盛たるや、この約三十年で600編を超える論文が発表されているほどである[1]。その勢いは中国国内にとどまらない。隣国の日本においても改革開放後の新語関連の論文がすでに37編以上も発表されている[2]。

新語に興味を示しているのは、言語学界だけではない。昨今の新語増加を受け、国家語言文字工作委員会が2006年度の新語“2006年汉语新词语选目”を発表したが、これはたちまちメディアやネットユーザーの物議を醸し、発表の二日後には中国の主要ポータルサイトである新浪網への書き込みが1700件あまりにもなったという[3]。

このように、新語研究は、現下の語を扱うため、研究者に限らず一般大衆の関心をも誘い、社会の注目を浴びているテーマである。加えて、新語という段階は、この世の全ての語の通過点であり、あらゆる言語現象の礎であるので、その研究の意義は深いといえる。それにもかかわらず、新語に関する研究成果はこれまであまりまとめられてこなかったが[4]、上述のような確固たる学術的意義がある以上、何が明らかになり何が明らかとされていないのかを明確にして、さらに研究を進展させていくべきであろう。そこで本稿では、改革開放後の新語研究の現況を考察していきたいと思う。

2. 研究対象

前述のごとく、新語関連の論文は多数発表されてきたが、その中には、先行研究を十分に踏まえていないために他の論文と内容の重複しているものもしばしば見受けられる。また、論文とみなされているものであっても、紙幅の少ない雑記にすぎないものも目にする[5]。したがって、本稿の目的である新語研究の潮流をそのような諸論文より把握することは難しいであろう。よって、考察対象には、研究の潮流に身を置いている著作、すなわち従来の学説を踏まえたうえで自説を展開している専著を選ぶこととしたい[6]。

このほか、時勢の面からみても、専著に目を向けていくべきだといえよう。管見の限り、改革開放後の新語の専著は、1990年代後半までは2冊程度を数えるのみであった。そのため、専著より学説史を整理することは難しく、筆者の知る限りでは専著のみを対象とする学説史研究は行われていないようである。この数年、新語の専著は次々と出版されるようになってきた。このような条件に恵まれた今こそ専著を扱った学説史整理に取り組む必要があるのではないだろうか。研究状況を考察する手順としては、まず全ての新語研究の基礎となる新語の概念規定に関する学説を明らかにし、その次に各書の研究内容を比較検討することとする。

3. 専著における新語

3.1「新語」という術語

本稿で扱うのは、表1にあげた改革開放後の新語を対象としている9冊である。

表1　新語専著一覧

出版年	書名	著者名	出版社
1995	新時期大陸漢語的發展與變革	刁晏斌	洪葉文化事業有限公司
1998	新词语・社会・文化	姚汉铭	上海辞书出版社
2000	汉语新词语与社会生活	陈建民	语文出版社

2000	新语词	陈原	语文出版社
2001	新中国成立以来汉语词汇发展变化研究	郭伏良	河北大学出版社
2002	汉语新词语研究	杨华	黑龙江教育出版社
2007	新词语的立体透视：理论研究与个案分析	宗守云	广西师范大学出版社
2008	现代汉语新词语计量研究与应用	亢世勇等	中国社会科学出版社
2008	当代汉语词汇发展变化研究	张小平	齐鲁书社

※以下、表1の専著に関しては、著者名等の情報を省略し、書名のみを明記する。

上記以外にも章の一つとするなど一部分で新語に触れている著作もあるが[7]、新語をメインテーマとして掲げていて、学術的価値の高い著作は表1のとおりである[8]。

さて、表1の書名をよくみると、同じ新語を対象としていても“新词语”、“新语词”と異なる名称で新語という意味が表現されている[9]。日本では、「新語」という術語がゆるぎないものとなっているが、もしや中国では術語がまだ定まっていないのであろうか。書名での表現に違いが出ているのは、著者の個性によるものかもしれない。書名ではなく、定義づけをする際ならば、誰もが理解しやすいようより正式で一般的な語を使うはずである。そこで、「新語」の定義づけをする際にどのような術語が用いられているのかを表2に示した。

表2　新語に対応する術語

分類	書名	使用術語
新词语	新時期大陸漢語的發展與變革	新詞語、（新時期大陸漢語）
	新词语・社会・文化	新词语、（新词）
	汉语新词语与社会生活	新词语、（新词）
	汉语新词语研究	新词语、（新词）
	新词语的立体透视：理论研究与个案分析	新词语、（新词）
	现代汉语新词语计量研究与应用	新词语、（新词）
	当代汉语词汇发展变化研究	新词语、（新词）、（当代汉语词汇）
新语词	新语词	新语词、（新词语）
新词	新中国成立以来汉语词汇发展变化研究	新词、（新词语）

※「新語」の定義を述べる際以外にも、「新語」の意で用いられている語があった場合は、その主なものを（　）で括り列挙した。たとえば、《现代汉语新词语计量研究与应用》では、定義について触れる際には“新词语”という術語を用いているが、それ以外の時には“新词”という語も用いている。

すると、9冊中7冊において“新词语”が用いられているものの、“新语词”、“新词”としている著作もあり、やはりその術語は一様でない。「新語」の「新」は、中国語でも“新”と表現されているが、「語」に関しては、“词语”、“语词”、“词”という表現の違いがみられる。なぜこのような違いがみられるのであろうか。用語が異なるということは、やはりこれらの指す意味もそれぞれ異なるものなのであろうか。“词语”、“语词”、“词”が通常どのような意味で捉えられているのか、言語学辞典や中国語辞典における語義を確認する[10]。

(1)　【词语】

词和词组；字眼[11]　単語とフレーズ。語句。

(2)　【语词】

指词、词组一类的语言成分。[12]

単語やフレーズの類の言語成分を指す。

㊀词和短语的统称。[13]　単語とフレーズの総称。

(3)　【词】

❶说话或诗歌、文章、戏剧中的语句

会話や詩歌、文章、演劇中の語句。

❸语言里最小的、可以自由运用的单位。[14]

言語において最小の自由に運用できる単位。

㊀语言单位术语。是最小的能够独立运用的音义结合体。[15]

言語単位の術語。単独で運用できる最小の音義結合体。

上記の語釈より鑑みるに、“词语” と “语词” はともに単語とフレーズをまとめて述べる際に用いられるようである。一方、“词” には単語のみを指す狭義と語句全体を指す広義の二通りの意味があるらしい。専著の内容をみれば、“新词语” などの前掲の術語がいかなる意味を持ち、なぜ異なる語で表現されているのかがわかるだろう。ところが残念ながら、大半の専著では、「新語」という術語の問題を軽視しており、“词语”、“语词”、“词” についての記述はあまり多くない。したがって、専著全てにおける “词语”、“语词”、“词” 使用の意図は把握できないが、まずは、“新词语” に関する記述から “词语” がいかなる意味で用いられているのかを考えていきたい。（以下太字・下線強調は筆者。）

(4) 《新词语的立体透视：理论研究与个案分析》(7頁)

新词语包括新出现的 “词” 和新出现的 “语”

新詞語は新たに出現した「単語」と新たに出現した「フレーズ」を含んでいる。

(5) 《现代汉语新词语计量研究与应用》(45頁)

新词语，从实际情况来说，应该包括新词和新语。为了讨论的方便，下文所论及的主要是新词，而兼及新语。

新詞語は実情からいえば、新単語と新フレーズを含まなければならない。論述の便宜上、以下で論及するのは主に新単語であり、新フレーズも兼ねる。

(6) 《汉语新词语研究》(9頁)

新词语是新的词和新的语的总和，新词应包括新造的词、新吸收引进的方言词、港台词、外来词、新的专门用语、产生了新义的旧有词语。新语是指各种固定词组，从理论上说，应该包括新惯用语、新谚语、新歇后语等等。

新詞語は新しい単語と新しいフレーズの総和であり、新単語は

新たに造られた語、新たに吸収導入された方言語、香港・台湾語、外来語、新しい専門用語、新語義の生まれた既存の語を含む。新フレーズは様々な固定フレーズを指し、理論上、新慣用語、新ことわざ、新しゃれ言葉などを含まなければならない。

さらに、《新词语·社会·文化》(14–15頁) では、“新词” との関連性にも触れている。

(7) “**新词语**”, 顾名思义, 并不限于“词”, 还包括“语”。……正如已举, 在已出的新词语词典中, 上海辞书出版社出版的名为《汉语新词词典》, 而有的则称《新词新语词典》, 不管书名上有否提到“语”, 收的条目中都包括“语”。……这样, 所谓**新词语**, 不仅包括一般的新词新语, 还包括新的格言、谚语、顺口溜这些特殊的新语。

「**新詞語**」は、文字通り、「単語」に限らず「フレーズ」も含む。……まさに先にあげたように、すでに出版されている新語辞典の中には上海辞書出版社出版の『漢語新詞詞典』、そして『新詞新語詞典』と称するものがあるが、書名に「フレーズ（語）」があげられているか否かにかかわらず、いずれも収録語には「フレーズ」が含まれている。……したがって、いわゆる**新詞語**は普通の新単語や新フレーズばかりでなく、新しい格言、ことわざ、流行り文句といった特殊な新フレーズも含むのである。

(4)～(7) をまとめると、“新词语” の “词语” は辞書と同様に “词” と “语” すなわち単語とフレーズを含み、“新词” の “词” も単語に加えてフレーズを含む場合があるという。“新词” についてさらに詳しくみるため、対象書のうち唯一実際に “新词” という術語を用いている《新中国成立以来汉语词汇发展变化研究》(3頁) の内容を確認してみよう。

(8) 我们在叙述新的词汇成分产生时，对“**新词**”和“**新词语**”的用法没有太严格的区分，二者都是包含新的词和新的专称性固定词组这两种单位，只不过“**新词语**”的用法更灵活些，更倾向于包括专称性固定词组，而且有时在总的论述中也包含熟语。“旧词”和“旧词语”的用法类似“**新词**”和“**新词语**”的用法。

我々が新しい語彙成分の誕生を述べる時、「**新詞**」と「**新詞語**」に対する用法はあまり厳格な区別がなく、どちらも新しい単語と新しい特定の固定フレーズの二つの単位を含む。ただ「**新詞語**」の用法がより柔軟で、より特定の固定フレーズを含む傾向にあり、全ての論述において熟語を含む場合もあるだけである。「旧詞」と「旧詞語」の用法が「**新詞**」と「**新詞語**」の用法に似ている。

(8) からも明らかだが、“新词”は新しい単語だけではなくフレーズも指しており、“词”を広義で捉えているのである。

さて、“词语”と“词”の意味は確認できたが、“语词”はいかなる意味で用いられているのであろうか。新語を“新语词”と表現している専著《新语词》の内容を確認してみたところ、辞書の語義のとおり用例には単語やフレーズがあげられており、単語とフレーズという内容の面では“词语”と“语词”に違いはないようである。

このように、“新词语”、“新语词”、“新词”はみな新しい単語とフレーズを指すことができ、“词语”、“语词”、“词”という違いは、示す内容の差異より来るものではなく、“词”を狭義と広義のどちらで捉えるかによるものであるといえる。つまり、“词”を「単語」と捉え“词”と“语”の両方を含むことを詳細に述べる場合は“新词语”や“新语词”と表現され、“词”を「単語＋フレーズ」と捉え概括して述べる場合は“新词”と表現されているにすぎず、この「新語」という術語自体の問題について深く考えられていないというのが現状のようである[16]。いずれにせよ、術語が統一されていないというこの事実は、「新語」という学問の概念規定が必ずしも十分になされてはいないということを物語っているのではないだろうか。

3.2「新語」の定義

上述のように「新しい単語とフレーズ」である新語には様々な呼称があり、術語が統一されていないわけだが、その具体的に指している内容自体は統一されているのであろうか。

この内容、すなわち定義についても、術語と同様、やはり統一見解が得られておらず、中には言及を避けている著作もある。概観すると、定義は「新しい」と「単語とフレーズ」の二方面から分析されている。つまり、「新語」の「新」と「語」がそれぞれ何を指しているのかに議論が集中しているようである[17]。

3.2.1「新語」の「新」

まず話題となるのが「新語」の「新」、すなわち「新しい」とはいつを指しているのかという問題であろう。

専著における定義を整理すると、①「新」の指す時期について定義づけはしていないが、同書の対象とする語の時期については言及しているもの、②「新」の指す時期、対象とする語の時期の両方について言及していないもの、③「新」の指す時期について定義づけをしているものの三つに分けることができる。その結果をまとめたものが表3である。

表3 「新語」の「新」についての見解

分類	書名
①対象語の時期のみに言及している	新時期大陸漢語的發展與變革
	汉语新词语与社会生活
	新中国成立以来汉语词汇发展变化研究
	当代汉语词汇发展变化研究
②時期に言及しない	新语词
③「新」の指す時期に言及している	新词语·社会·文化
	汉语新词语研究
	新词语的立体透视：理论研究与个案分析
	现代汉语新词语计量研究与应用

表3をみると、①が4冊、②が1冊、③が4冊であり、「新」についての定義づけをしていないもの（①と②）の方が若干多いが、「新」に言及するか否かについては意見が二分しているといえよう。

では③の専著は、「新」についていかなる定義を提唱しているのであろうか。次の（9）～（12）を参照されたい。なお、短いものはそのまま引用し、長いものについては要約をあげた。

（9）《新词语・社会・文化》（14頁）

总之，新词语的时间界限是：以70年代末出版的《现代汉语词典》为基准，参考十一届三中全会（1979年）和“文化大革命”（1966年）为时间界限。

要するに、新語の時間の境界は：70年代末に出版された《现代汉语词典》を基準とし、11期3中全会（1979年）と「文化大革命」（1966年）を参考にして時間の境界とする。

（10）《汉语新词语研究》（3–6頁を要約）

新語の時間の範囲については、広義と狭義の概念を打ち立てることが必要となる。広義では、時間の範囲が広く、歴史的な時代の特徴を体現する新語すなわち歴史性を備えた新語を指し、五四時期の新語、新中国成立時期の新語というように時点によって区別される。狭義では語彙的特徴を体現する新語を指し、言語学上の新旧転化に必要とされる時間すなわち20年前後以内に出現した語をいう。この狭義の新語も20年後には、広義の新語へと変化する。

（11）《新词语的立体透视：理论研究与个案分析》（6頁を要約）

①辞典編纂・学校教育における実用性・②研究における便利さ・③一般大衆の受け入れやすさ・④将来にも適用できる持続性という観点から、新語を「近年出現した偶発的ではなく、勝手に

作られたのではない語」とする。

(12)《现代汉语新词语计量研究与应用》(47頁)

综上所述，从“新”的方面，我们认为可以将新词界定为：1978年以来通过各种途径产生的、具有现代汉语常用词汇所没有的新形式、新意义或新用法的词。

以上を総合すれば、「新」の面からは、新語を1978年以来様々なルートを通じて生まれたもので、現代中国語の常用語彙にない新しい形式、新しい語義や用法を備えた語と線引きできると考えている。

(9)～(12) をみると、(10) と (11) はともに具体的な年代を指定しておらず、新語の「新」を流動的なものと捉えているが、(9)[18] と (12) は具体的な時期を明示している。

話題にする新語がいつのものなのかを明示することは、論を進めていくうえで欠かすことができない。したがって、各書で個別に「新語」の「新」の指す時間を設定するのは当然であろう。しかしながら、(9) や (12) のように個々の著作の枠を超え、新語全体の定義として時間を定めるのは、あまり有用とはいえないだろう。「新」の指す時間は時の経過とともに変化するものだからである。(10) で時点と述べられていたが、「五四時期の新語」というように修飾語がついている場合は、「新」が五四運動の時期において「新しい」という意味であることは明白である。しかし、単独で「新語」という時の「新しい」とは現在を対象としており、現時点において「新しい」わけで、その現時点というものが常に変化していくものである限り、「新」の具体的な時期を定義づけることは不可能なのである。したがって、「新語」の「新」についての定義は恣意的にならざるを得ないだろう。そうはいっても研究において研究対象を明確にすることは必須であり、規定しないのがよいともいいきれない。(11)の一般大衆の受け入れやすさを考慮するという意見はもっともだが、新しいと感じるか否かには個

人差もあるので、「近年」という規定はやや曖昧すぎる感がある。よって、新語の「新」の対象とする時期については、各論著ごとにその都度言及することで対処していくよりほかないといえるだろう。

3.2.2「新語」の「語」

次に浮上してくるのが「新語」の「語」とはいかなる語を含むのかという問題、すなわち語の構成要素である語形や語義などのうち、どの部分が新しければ「新語」とみなされるのかという問題である。

各書の見解をみると、語形が新しいものについてはその示す意味が新しかろうと古かろうと新語に含むということで一致している。見解が分かれているのは、語形が古いものについてである。具体的には、①語形が古いが、意味の新しいもの・②語形も意味も古いのだが、しばらく死語となっていて新たに復活した、または使用範囲が変化したものの二種類を含むか否かで意見が錯綜している[19]（表4）。

表4　語形の古いものに関する見解

書名	①語形が古い・意味が新しい	②語形・意味が古い（復活した語・使用範囲が変化した語）
新時期大陸漢語的發展與變革	○	○
新词语・社会・文化	○	○
汉语新词语与社会生活	○	△
新语词	○	△
新中国成立以来汉语词汇发展变化研究	○	○
汉语新词语研究	×	○
新词语的立体透视：理论研究与个案分析	○	○
现代汉语新词语计量研究与应用	○	○
当代汉语词汇发展变化研究	○	○

※定義の内容や新語としてあげている例より判断し、新語とみなしているものは○、みなしていないものは×、みなすか否か明言していないもの・②の一部のみ含むものは△とした。

表4では、大半の著作で①と②が○となっており、①と②の両方を新語に含んでいる。つまり、語形が古くても他に一点でも新しいと思われる要素があれば新語とするという考えが多数を占めているのである。唯一×がついているのは①を含まないとしている《汉语新词语研究》であるが、これも実質、①と②を新語とする見解と変わらないようである。というのも、同書では、①のように既存の語に新語義の生まれたものを“新义语”と名付けて新語と区別しているものの、この“新义语”も新しい言語現象として重要なものであると述べ、同書の研究対象にしているのである。①を“新词语”すなわち「新語」と銘打った同書の研究対象とするということは、大まかにいえば①も新語であるといえよう。

語形が古いものを新語に含むか否かという議論は、我々が通常「新語」に抱いているイメージと言語学的な視点から考えた「新語」の実体との落差より生まれたものである。我々が「新語」という言葉を耳にした時、普通は、新造語、つまり語形の新しい語を想像する。しかしながら、語は何も形のみから成るわけではない。見慣れた語形のものでも、従来の意味で通じない時には辞書を引く必要がでてくるように、意味の変化も切り捨てられない言語の重要な変化である。新語という現象の最大特徴は、以前と異なっているという変化であり、形の変化である新造語のみを取り上げても、変化すなわち新語の全貌はみえてこないのではないだろうか。また、復活した語、すなわち古い語形・古い意味のものでも、長年用いられていなかったわけであるから、その意味が一般に知られていない可能性が高い。したがって、実用の面から、①と②の両方を新語に含むほうが合理的だと考えられるだろう。しかし、どうしても語を狭義で形のみと捉え、意味を語の一部とするのには抵抗があるならば、大まかではあるが、「新語」とは別に「新言語現象」という新たな術語をつくって言語変化の現象全般に対応するよりほかないのではないだろうか。

上述したとおり、「新語」は、術語として用いられる際にはおおかた語形・語義など何か一つでも新しい要素を備えているものを指している。しかし、「新語」は専門的に用いられるだけでなく、日常よく口にされる言葉

でもある。そのため、語形が新しいものという常用語としての意味も考慮することとなり、定義を下すことが難しくなっているのである。

このように現今の新語研究における術語・定義にはともに曖昧な部分がうかがえる。

4. 専著の内容

以上のような概念で捉えられている新語について、これまで何が明らかにされてきたのであろうか。専著全体の内容や主旨より研究動向を考察していく。

4.1 概要と特色

各書の概要を出版年度順にみていくと、まず初めにあげられるのが《新時期大陸漢語的發展與變革》だが、管見の限り、同書は改革開放後の新語の専著として最初のものである。内容は、語彙と文法の二部から成り、語彙編では、主に新しく誕生した語、外来語、旧語の復活や新用法、方言といった誕生経路ごとに新語の特徴がまとめられている。視点を変え、社会文化背景と新語との関係に主題を置いたのが、《新词语・社会・文化》である。《汉语新词语与社会生活》もまた新語が社会を反映しているという観点より新語の特徴をあげている。用例に改革開放以前の新語もあげ、特定の時代に限定しない新語の概要を述べているという点で上掲の3冊と異なるのが、《新语词》である。同様に改革開放後以外の時期の新語も対象としたものに《新中国成立以来汉语词汇发展变化研究》がある。同書は、新中国が成立した1949年以降に生まれた新語全てを対象とし、語彙の発展変化に影響を与える要因、新語の誕生と起源、新語の造語法、語義変化、古語の衰亡と復活、熟語の変化の概況について触れているが、一部、新中国成立後～改革開放前と改革開放後～現在というように時代区分ごとに特徴をあげている箇所もあり、通時的な新語研究という面で他の専著と一線を画している。

《汉语新词语研究》は、概説、意味内容、構造形式、社会言語学、社会心理、文化言語学、規範化の広い観点から改革開放後の新語を総合的に分析

しているが、語そのものの解説は少なく、大量の語の列挙に重点が置かれている。そして、新語の専著の世界に再び新たな視点を投じたのが、《新词语的立体透视：理论研究与个案分析》である。その内容は書名のとおり新語の理論研究と個別の事例分析から成る。主に新語を新語形、新語義、新用法に分け、語彙全般に関する語の構成法、語義学理論、語用論と関連させて新語の特徴を述べているが、言語理論の叙述に重きを置いたためか本題の新語の理論分析よりも語彙全般についての理論説明に比重がかかっている箇所もみられる。一方、視点のみならず言語資料をも革新したのが、《现代汉语新词语计量研究与应用》である。同書は、新語研究にコーパス言語学の手法を導入し、大規模コーパスによる統計データを駆使して、新語の定義や起源、タイプ、文法特徴、語の構成法則、語彙の社会との関係といった理論研究と新語辞典の編纂や中国語データ処理における新語の識別、発見といった応用研究を行っている。《当代汉语词汇发展变化研究》は、形態素、語義と形態素義、造語の発展変化といった新時期の中国語語彙の発展変化を新語の増加と語義の変化という二方面から研究している。

このように概略的な分析から始まった新語の専著は、現在では社会言語学、理論研究、コーパス言語学といった様々な観点が取り入れられ、より細緻なものとなってきている。

4.2 内容にみられる共通点

しかしながら、これらの書籍は、その視点・構成こそ異なるものの、内容の大筋をつかむと、「いかなる新語が生まれ、いかなる特徴を備えているのか」といった新語の様々な特徴を解明することを目的とした類型論的な研究であるという共通点がみられる[20]。

そのうえ、その共通した目的の下で得られた結果は詳細に至るまで一致しているのである。以下に例をあげよう。

《现代汉语新词语计量研究与应用》は先にも述べたとおり、従来の研究の対象範囲の限界を超えるべく、大規模コーパスを用いたもので、この十年ほどの専著の歴史において基礎資料に最も変革がみられた著作といえる。

これと対照的におおよそ辞典のみを基礎資料とした初期の研究書が《新時期大陸漢語的發展與變革》であろう。仮に各書の研究結果に違いが出ているとするなら、言語資料の面から考えると、この2冊の研究結果こそ一番大きな差異がみられるにちがいない。

そこで、この2冊のあげている新語の特徴を比較すると、《新時期大陸漢語的發展與變革》では、新時期語彙の特徴として、「語数の激増」、「新語をつくることのできる構成成分の出現」などをあげ、新しく誕生した語の特徴として「単義語が多い」、「字をみて意味がわかる」という点をあげている。すると、これらの点は《现代汉语新词语计量研究与应用》で新語の特徴としている「新造語を主として簡略語、専門用語、外来語、旧語の新用、方言語、修辞用法が固定化した語の大量出現」、「類推して模造する、一形態素を中核として大量の語群が構成される」、「単義性が優勢である」、「語義の表面化傾向」と合致しているのである。つまり、近年大規模コーパスを用いて叩き出された結果は、精密さの違いはあれど、十数年前の結果と大差ないわけである。

このような研究結果の一致は、各書の用例からもうかがえる。各書を読み比べていくと、同一の語が例示されていることが非常に多い[21]。これは、新語が大量に生まれているとはいえ、特徴のある語、説明しやすい語が限られるためであろう。“卡拉OK”や“超市”などは8冊にわたってみられ、“的士”に至っては9冊全てにおいて用いられているほどである。そのうえ、これらの語に対して全く異なる解釈や分析がなされているわけではないため、他の著作と内容が重複しているように見受けられるのである。もちろん、同じ研究方向であっても、新語が続々と生まれていくうえで最新の情報を提供するという点やより深く詳細な分析ができるという点では、大いに研究意義があるだろう。しかしながら、大筋の研究結果の一致は、専著全体、あるいは新語研究全体からみた場合には、新語の特徴解明を目的とした類型論的研究は飽和状態にあるということを暗示しているのではないだろうか[22]。さらに、このような研究手法は昔から変わらず存在しているものでもある。たとえば、日本は中国より早くから新語の研究体制

が整えられていたが、その日本の新語研究を例にあげるなら、七十年近く前に発表された新語の専著でもすでに新出語・相対的新語・新用語・新造語・新流行語といった分類がなされ、借用法・合成法・派生法・類推法・省略法・逆成法・固有名詞の普通化といった造語法もあげられている[23]。このことからも、今後は、伝統的な語彙学から脱却しきれない研究すなわち特徴解明に重きを置く研究のみに固執せずに、他のアプローチにも目を向け、新語研究を補完していく必要があるといえるだろう。

5. おわりに

本稿では、改革開放後の新語研究の現況について考察してきたが、現在の新語研究では、研究の基礎である新語の概念規定についてまだ曖昧な点がみられる。具体的には、新語を表す術語自体が識者により異なっており、定義についても「新」や「語」という概念規定の難しさにより、いまだ完全なる統一見解は得られていない。このような状況の下、様々な手法を取り入れて行われてきた研究は、緻密さを増してきたが、その内容には大きな共通点がみられる。その共通点とは、前述の「いかなる新語が生まれ、いかなる特徴を備えているのか」という新語が誕生した後の特徴の解明に重きを置いているということである。しかしながら、新語があらゆる言語現象の礎、つまり始まりである以上、「なぜ新語がこれほど多く誕生するようになったのか」「新語はいかに生まれてくるのか」という新語誕生の前段階の探究にこそ新語研究特有の学術的意義があるのではないだろうか。先に、新語の最大の特徴は以前と異なるという変化だと述べたが、この変化を考察するには、やはり変化を生みだした諸要因の検討が欠かせないはずである。このような新語誕生の社会背景などを重視した研究は従来あまり顧みられてこなかったが[24]、新語という現象の全貌を捉えるには、やはり誕生後の段階だけでなく、誕生前の段階にも目を向けなければならないだろう。このほか、研究に際し、他の言語との比較も取り入れれば、中国語新語ならではの特徴がより鮮明となるにちがいない。

このような考えの下、筆者は、改革開放後の新語における日中同形語に着

目し、誕生背景や定着要因の検討を試みてきた。考察を行った“新干线”[25]という語からは、市場経済の導入によって競争社会となり、迅速化・効率化が求められるようになった中国社会の変化が垣間見え、“老龄”[26]の分析からはその普及の面で一人っ子政策との関連性がうかがえた。この考察結果からは、一見社会制度と無関係にみえる語であっても社会変化の影響を受けて誕生しているという言語の誕生条件の片鱗、政治政策の影響による普及といった中国社会ならではの新語の特徴もみえる。したがって、このように、新語自体の特徴だけではなく、新語を生みだした社会環境も充分検討し考察していくことが、新語という言語誕生のメカニズムを把握するのには重要なのではないかと考えている。

注

1　亢世勇等著《现代汉语新词语计量研究与应用》（中国社会科学出版社、2008年）1頁によれば、1980年～2007年までで600編余りの新語関連の論文が発表されたという。

2　雑誌記事データベースMAGAZINEPLUS（日外アソシエーツ）にて、1980年1月～2008年12月に発表された雑誌論文のうち、キーワードに「新語」「新词」「新生詞」「当代漢語」「新時期」「流行語」「流行詞」「改革開放」を含むものを検索した。この中から、改革開放後の新語に関連する論文を抽出したところ、合計37編の論文が確認された。（重複するものは取り除いた。）

3　国家语言资源监测与研究中心编《中国语言生活状况报告2007上编》（商务印书馆、2008年）223頁。

4　苏新春主编《二十世纪汉语词汇学著作提要・论文索引》（上海辞书出版社、2004年）324–336頁は、20世紀における中国語語彙研究の主要な論著を収録したものであるが、ここに“新词语”としてあげられている新語関連の論文で、学説史を主にまとめたものは王铁琨《10年来的汉语新词语研究》（《语文建设》1991年第4期）、姚汉铭《新时期新词语研究述评》（《汉语学习》1993年第4期）、刁晏斌・盛继艳《近10年新词语研究述评》（《辽宁师范大学学报》2003年第1期）の3編しかないようである。

5　たとえば、苏注4前掲書に主要雑誌論文として掲載されている《如何辨识词典中找不到的新词？》（《国外社会科学》1981年第7期）は、一読

者というだけで執筆者の名があげられていないうえ、紙幅も2頁足らずで、論文というよりもコラムというべきものである。

6　改革開放後の新語研究の萌芽といえる吕叔湘《大家来关心新词新义》(《辞书研究》1984年第1期）のように学説史を考えるうえで重要な論文も当然あるが、本稿では紙幅の関係上専著のみを対象とした。こうした論文については今後別途検討していきたい。

7　たとえば、陈建民著《中国语言和中国社会》(广东教育出版社、1999年）では、一部の章で改革開放後の新語について述べている。

8　《汉语新词语与社会生活》と《新语词》は、一般向けの紙幅の少ないものではあるが、新語を専門的に取り上げている点では他と変わりないと考え、対象とした。他方、李起民・田雨华・刘胜兰主编《中国当代新词语的来龙去脉》(中国文史出版社、1995年）は、書名に辞典とは明記されていないが、1949年の建国以降の政治用語が百科事典風にまとめられたもので、内容が辞書と変わらないので対象外とした。

9　専著に限らず、辞典名や苏注4前掲書に収録されている論文名においても“新词语”“新词新语”“新词”“新语词”“新语汇”“新生词语”といった名称がみられた。

10　葛本仪・王立廷《建国以来对“词”“词汇”概念的研究》(《语文建设》1992年第4期）や朱一之编《现代汉语语法术语词典》(华语教学出版社、1990年）16–19、207–208、253頁において、“词语”、“语词”、“词”に関する先学の様々な解釈が列挙されているとおり、“词语”、“语词”、“词”といった術語の定義については、近年歩み寄りがみられるとはいえ、長年議論が交わされてきており、一概に断ずることはできない。よって、本稿における興味は、あくまで“新词语”、“新语词”、“新词”という際の“词语”、“语词”、“词”が何を示しているのかにあり、“词语”、“语词”、“词”自体の定義の追究にあるのではないということをここで申し述べておきたい。

11　中国社会科学院语言研究所词典编辑室编《现代汉语词典》第5版（商务印书馆、2005年）222頁。

12　注11前掲書1665頁。

13　唐作藩编著《中国语言文字学大辞典》(中国大百科全书出版社、2007年）730頁。

14　注11前掲書221頁。

15　注13前掲書85頁。

16　《当代汉语词汇发展变化研究》14頁には、“在对当代词汇的研究中，还经常出现语言词与言语词不分、**词和语不分**、全新词和旧词载新义不分的现象，往往导致论述中概念和理论不清晰、研究方法上定量和定性模糊

的情况。”（現代語彙に関する研究において、ラングに用いられる語とパロールに用いられる語を区別しない、**単語とフレーズを区別しない**、全く新しい語と旧語の新語義を区別しない現象がまだ常に出現しており、往々にして論述中の概念と理論の不明瞭や研究方法上の定量と定性が曖昧な情況を引き起こしている。）とある。ここからも新語の術語“新词语”、“新语词”、“新词”の区別の曖昧さがうかがえる。

17　このほか、《新時期大陸漢語的發展與變革》や《新语词》では新語と流行語との違いについて触れている。《汉语新词语与社会生活》では「すぐに消えてしまうような語は新語に含まない」、《新词语的立体透视: 理论研究与个案分析》では「新語は偶発的な語ではない」という特徴も加えている。

18　(9) の《新词语·社会·文化》では (9) の定義の後で、“总之，具体使用时的界限是或然的，是视“用”的目的而定的。”（総じて、具体的に用いる際の境界は変動的であり、「用いる」目的によって決定するものである。）(17頁) と付け加えている。しかし、“一般地说，新词语的研究可以取中共十一届三中全会（1979年）为时间上限，因为这些新词语五光十色地折射了新时期的方方面面，最富于社会价值和时代价值。”（一般的にいえば、新語の研究は中国共産党11期3中全会（1979年）を時間的上限とすることができる。なぜなら、これらの新語は様々に新時期の各方面を表現しており、社会的価値や時代的価値に最も富んでいるからである。）(16頁) という件もあり、やはり「新」の指す時間は、(9) と同様1979年以降が一般的だと考えているようである。

19　《新時期大陸漢語的發展與變革》、《汉语新词语研究》、《新词语的立体透视: 理论研究与个案分析》、《现代汉语新词语计量研究与应用》、《汉语新词语与社会生活》では、語形や意味の他に用法についても触れているが、意味が新しければ用法もおのずと新しくなるはずであるし、語形に加え用法までもが古いものは既存の語であり、新語ではないだろう。つまり、①も②も用法は新しく、あえて用法の新旧に言及する必要はないと考え、ここでは省いた。《新词语・社会・文化》では、語形や意味に加えて音声も考慮しているが、音声の新旧は新語の判別にあまり関係しないようなので省略した。

20　当然前述したような各書独特の特色もみられる。例をあげるなら、《现代汉语新词语计量研究与应用》の応用研究の部分は他の新語の専著には取り上げられていないものである。

21　このほか、同一書内の語の重複もみられる。
《新词语的立体透视: 理论研究与个案分析》では、「新語義、新用法は境界線が難しい」とあるが、各新語には新語形だけ、新語義だけ、新用法

だけが生まれているわけではない。したがって、一つの語が様々な新語の特徴に関係しているためか、各書で、同一語の重複利用が目立つように見受けられる。読み手が理解しやすいように重複利用されているのかもしれないが、新語全般の現象を研究対象としているのならもう少し幅広い用例を扱ってもよいかもしれない。

22　于根元著《二十世紀的中国语言应用研究》(书海出版社、2000年)283–284頁ではおおよそ次のようなことが述べられている。(以下は筆者要約。)

> 中国の新語整理と研究はまだ深いものではない。新語といえば常に新造語、方言、外来語、既存語の新語義、死語の復活などの方面から陣容を構え、語義といえばすぐ語の原義、派生義と比喩的語義、ならびに語義の拡大、縮小、転移などに目を向けるといった具合に、今までの語彙学の枠を抜け出せず、視野もあまり広くない学者もいる。逆に、重要な論題でありながら、いまだ顧みられていない、あるいは深く行われていないものもある。たとえば、新語の出現原因や条件、新語の品位の確定や向上、修辞現象が語彙化できない内在法則、さらに新語の伝播、隠退、新語と漢民族の文化伝統などである。

これは、専著に限った評論ではないが、ここからも、やはり新語研究全体において、典型的な語彙学の手法に基づいた類型論的研究がなされてきたことがわかる。また、新たに研究すべき論題も提示しているが、提示するのみにとどまり、管見の限り、于氏自身はその論題について深い研究を行っていないようである。

23　加茂正一著『新語の考察』(三省堂、1944年)

24　前述のとおり《新词语・社会・文化》や《汉语新词语与社会生活》では社会との関係にも触れてはいるが、政治、情報、経済といった分野別に語を列挙している傾向が強く、詳しい分析までには至っていないといえるだろう。

25　拙稿「改革開放後の新語における比喩的用法――日中同形語“新干线”」(『藝文研究』90号、2006年)

26　拙稿「新語“老龄”の誕生と定着――中国語“老龄化社会”普及の要因を探って――」(『藝文研究』92号、2007年)

[付記] 本稿は平成20年度文部科学省科学研究費補助金特別研究員奨励費(研究課題「中国語新語における日中同形語の研究――同形異義語にみる日中言語文化の違いを中心に――」)による研究成果の一部である。